

優秀賞  
ゆうしゅうしょう

高校生区分  
こうこうせいくぶん

友達  
ともだち

沖縄県立小禄高等学校 三年  
おきなわけんりつおろくこうとうがっこう さんねん

川村 真里依  
かわむら まりい

私が小学校六年生の時、クラスに転校生が来ました。その子は特別支援の学校に通っていて、二週間程一緒に授業を受けることになりました。私は当時周りに障害を持った友達がいなかった事もあり、「障害」というのが具体的にどのようなものなのかを知りませんでした。

その子はとても明るくて活発なごく普通の女の子でした。私は友達が一人増えたと思いきごく喜びました。休み時間に

は友達とすぐにその子の席に行き、おしゃべりをして盛り上がりました。移動教室も学校を案内しながら一緒に行きました。私はもうその子が障害を持っているなんてすっかり忘れていました。なんで特別支援の学校に通っているんだらう。このままずつとこの学校に通えばいいのに。と呑気な事を考えていました。

しかしそんな時でした。廊下を歩いていると向かい側から男子生徒が走ってきてその子の肩にぶつかったのです。その衝撃でその子が持っていた教科書とノートが開いて落ちてしまいました。音に驚いた男子生徒がこちらを振り返ると、落ちたノートと私たちを見て少し嫌な顔をして何も言わずに走って行きました。私はその生徒の態度にイライラしながらも落ちたノートを拾おうとしたその時でした。偶然落ちて開いてしまったノ

ートの中身を見てしまったのです。そのノートには小学校  
六年生が書いたとは思えない形の文字が綴られていました。

漢字はほとんどなく、平仮名とカタカナの見分けが少しつきづ  
らい字でした。私はおそらく動揺を隠せず、少し変な顔でノー  
トを見つめていたのだと思います。その子は「汚い字でごめ  
ん。」と言って悲しそうな顔をして私の手からノートを取りま  
した。私はその子を傷つけてしまったと思い何か言葉をかけよ  
うとしました。しかし何と云っていいか分からず、そのまま別の  
話をして話題を逸らしました。

それから私は授業中もたまにその子の様子を見るように  
なりました。私とその子は席が離れていて、何を書いているの  
かはよく見えませんでした。その子は先生が話し始めてもず  
っと板書をしていました。放課後、担任の先生にその話をする

と、その子は発達障害で字を書くのと計算をするのが苦手なん  
だと教えてくれました。私はその時にやっとその子が特別支援  
の学校に通っている理由が分かったのです。先生は私に「これ  
からも気にせず、仲良くしてね。」と言いました。私は廊下で  
ノートの字を見てしまった時から気持ちが悪くならず、先生の  
話に上手くうなずけませんでしたが。そんな私に先生は「あの子  
は勉強をするのが周りの子より少し苦手みたい。でも、それ  
以外はみんなと何も変わらないよ。まりいもそう思わなかつ  
た？」と聞きました。私は朝最初にその子と話した時を思い出  
しました。確かにその子は私たちと何も変わらず明るくて、私  
たちよりも心の優しい女の子でした。先生は私に「明日はも  
っとそう思うよ。」と言って、笑いました。

先生の言葉の意味は次の日すぐに分かりました。その日は休

育でドッチボールをしました。メンバーはよく覚えてはいませんが、私はその子と同じチームでした。私はボールを避けるのに夢中になりました。隣を見ると、その子もすごく楽しそうでした。私はその時障害なんてその子には全く関係ない、その子は私と変わらないまったく普通の女の子なんだと改めて実感しました。同じボールの恐怖を経験したその子は、いつの間にかすっかりクラスに馴染んでいました。私は字を見ただけでその子に「障害」というフィルターをかけてしまった事をすごく後悔しました。今思えば、ぶつかってきた男子児童が嫌そうな顔をして何も言わなかったのもノートの中身を見て転校生がその子だと気づいたからかもしれない。しかしもうそんなことはどうでも良くなりました。障害が有る無しに関わらず、私はその子とずっと遊びたいと心から思ったからです。

ドッチボールの勝敗もその後その子とどんな話をしたのかも正直よく覚えていませんが、私たちの間に障害という壁はもう存在していませんでした。世の中の人が障害を持つ人へ偏見を抱いてしまうのは、その人の事をよく知らない事から起こる不安が原因だと思えます。だからこそ、私はこれから出会う全ての人を勝手な偏見で決めつけたりせず、その人の本当の中身を見れるような人になりたいと思います。